



父と兄の書棚が招いた変な読書



志茂田景樹

幼少期の僕は腺病質で、見るからに虚弱でした。でも、終戦の翌年にまだ国民学校と称していた小学校に上がったときには、漢字を一〇〇ぐらいは知っていたと思います。

例を挙げれば学校とか、少國民とか、雄辯とか、豹とか、颯です。その年の三月二五日に六歳になったばかりの虚弱児がなぜ、そんな旧漢字を読めていたのかと不思議に思われる方が多いかもしれません。

そう、その不思議こそ、僕の読書を脈絡なく大変偏ったものにさせた元凶なのです。

僕は母から読み聞かせをいっぱいやっ

て貰って育ちました。そのときの母の声は今でも僕の耳朶に染みついております、その声と共に幼ない心で感じとった安心、不安、喜び、恐怖などの感情が甦ってきます。

母はアンデルセンの物語が好きだったようで、その絵本を多く読み聞かせてくれました。

「あなたがしつこく同じ絵本をこれ読んで、とせがんだせいよ」

後年に、母はそう言ったことがありますでしたが、どちらでも同じことだったのでしよう。

アンデルセンのもので僕がとても怖がった絵本は『赤い靴』でした。赤い靴を

履いた女の子が赤い靴の勝手気まま通りに行動しなければならぬ恐怖はよく伝わってきたし、その赤い靴を切り離すために、首切り役人によって女の子が両足首から切断される場面は怖くて怖くて気が遠くなったような記憶があります。

でも、母の声を聞いていれば場面が変わり、安心できたのでした。その『赤い靴』を僕がこれ読んでと繰り返しせがんだのなら、怖いもの見たさの一念が働いたのかもしれない。

僕が四歳五歳の頃は太平洋戦争も日本にとって大いに敗勢に傾いて、銃後の暮らしにも余裕がなくなり、母も読み聞かせどころではなくなったのでしよう。

その四、五歳頃の僕は父が新聞を読んでいるとその肩に掴まりながら、見出しに躍る漢字を指さし、

「これ、何(何と読む)?」

「これは?」

などとうるさかったそうです。

そうして覚えたほかに、母が読み聞かせに使った二〇冊あまりの絵本で漢字の読みを覚えしました。仮名だけの絵本でどうして漢字を覚えたの、と訝しく思われるかもしれませんが、それには訳がありました。

絵本を僕に読み聞かせするどころではなくなった母は、その絵本を床の間に無造作に積んでいたのです。僕は床の間の前にあぐらをかいて、アトランダムに抜きとった絵本のページをめくるようになりました。すべてお馴染みの場面です。

僕の興味は絵本の絵の場面が終わると、巻末についている数枚の廉価紙の読み物ページに向かいました。保護者向けのページで、内容は解らなかつたし、どうでもよかったのだと思います。

漢字にはすべてルビが振ってあり、自然に読めるようになっていたカタカナがいくつかあったので、それを探して喜んでいました。

馳という漢字に(イタチ)とルビが振ってありました。保護者向けページに出てきた馳ですから、おそらく(馳っこ)とかの熟語として登場していたのではないのでしょうか。さて、僕の本名は下田忠男ですが、四歳になったときには僕はシモダタダオと書くことができたそうです。

五歳になったときにはカタカナのすべてを書けるようになっていましたが、これは一五歳年長の兄のお陰でした。兄は旧制の商業学校から、後の税務大学の前身である大蔵省税務講習所に入所しました。二年終了制ですが、戦局が厳しくなつての繰り上げ卒業で昭和一九年(一九四四)の秋には卒業し、翌二〇年の三月に陸軍に召集され、すぐに現中国東北部の旧満州へ渡りました。

入営日が近づいて、兄は僕にカタカナを教えてくれました。廊下のガラス戸の

結露したガラスに、兄は指でアと書いて発音します。別のガラスに僕はアと書いて発音します。

すでに読めるカタカナがかなりあったので、その教わり方でカタカナのほうは早く終わりました。そうしてひらがなに移りましたが、そのすべてを覚えないうちに、兄は入営するためにわが家を後にしました。

余談になりますが、旧満州に渡った兄は、ソ満国境に程近い地に駐屯しました。八月九日、ソ連軍が侵攻してきて兄が所属していた部隊は戦いながら敗走し、同月一五日の終戦も知らずに戦い続けて全滅したそうです。

となると、戦死になるはずですが、遺体もなく戦死の状況を確認できなかったため、当初は行方不明兵の扱いで戦死公報は発行されませんでした。そのことが、戦後の僕の読書傾向に大きく影響したのです。

旧国鉄官舎のわが家には、二つの書棚がありました。一つは父が居室にしてい

た四畳半の壁際にあつて、五段の書棚でした。父は電気工事畑の旧国鉄職員で、その関連の本が多かったのですが、その他の本は娯楽書も含めて雑多なジャンルのものでした。

もう一つの書棚は三畳間の兄の部屋にありました。観音開きの扉がついた本箱で、ガラス製の扉は内側に芥子色の布が張られていました。開けると、丈のサイズが異なる三段の棚に兄の蔵書が詰まっています。書棚部分の下部は、左右対称の引き出しになっていました。

その書棚を側面に配した感じで座り机が置かれていて、机上にはいつも二〇歳の兄の写真が収められた写真立てと、その前に陰膳が供えられていました。戦後の一時期、僕は学校から帰ると、茶の間にランドセルを放り出し、兄の部屋へ入るのが日課でした。

正座して観音開きの扉を開けると、お帰り、という兄の声を聞いたような気がしました。その日の気分で抜きとった本のページを繰っていくと、はらりと栞

や、押し花が落ちました。そっと拾い上げて匂いをかいでから書棚に戻しました。兄の匂いは心地よかったです。

兄の蔵書の殆どは詩集、歌集でした。島崎藤村、若山牧水、北原白秋、石川啄木等々。日本の詩人、歌人のものより冊数は少なかったのですが、『ハイネ戀愛詩集』や、『ヴェルレーム詩集』など、ヨーロッパの詩人のものを回数多く抜きとっていました。

箱入り美装本で飽きることがなかったからです。ヴェルレームの戦後の表記はヴェルレーヌに統一されていますね。

ところで、日課のように兄の蔵書を手にしていても、内容に興味があつたわけではありません。興味があるものもない、短歌一首の一部、詩編の一部が読めたとしても、小学一年二年の僕には意味が取れなかつたので馬の耳に念仏でした。ただ、兄を身近に感じとりたいの一念です。

小学三年の冬休み頃だったでしょう。父の書棚の本を抜きとるようになつ

たんですね。そうして、僕がはまったのは巻数こそ忘れましたが、大日本雄辯会講談社が刊行していた講談全集の一冊でした。

ペラペラめくると総ルビで、ちょいちょい挿絵も出てくるではありませんか。『東海道中膝栗毛』でした。のろのろと読み進めると、面白いんですね。小田原の宿には東日本には珍しい五右衛門風呂があつて、便所下駄を履いて湯に入った喜多八が彌次郎兵衛に監視されてガタガタやっているうちに釜を踏み抜いてしまつたり、熱田神宮の門前町である宮宿では隣室の女客に彌次郎兵衛が夜這いのかけたが、盗人と間違えられて騒がれたり、挿絵もどぎつくて笑えました。

旅籠とか、護摩の灰とか、カタカナでルビは振つてあつても、初めは意味が解りません。でも、繰り返し出てくるうちに、宿屋のことか、旅人を狙うコソ泥のことか、と理解できるようになりました。

虚弱でおくてだったのに、なぜか、密

通、懇ろになる、夜這い、乳繰り合う、などという言葉には罪悪意識を持ちながらも、胸がときめいたものでした。

その巻には「捨て身の構え」「夜もすがら検校」などの短編講談も収められていました。検校が盲目の人の世界では高位の人だということも、この短編講談で知りました。

「東海道中膝栗毛」は、十数回は読み返したと思います。当時の風俗習慣、人種、山越え川越え、乗合船などの道中模様もくつきりと浮かびあがるようになりました。こうして、小学生にしては豊富な漢字力と読解力を養った僕は、小学五年六年の頃は兄の蔵書も読めるようになったのです。『ハインネ戀愛詩集』の「女」というタイトルの「夜毎、彼女は彼の胸にゐた」の一行に、（乳繰り合う）を重ねたことは、今でも思い出すと顔が赤らみます。

兄の蔵書には、文庫本が数冊ありました。戦前に兄が買収めたものですから、みな岩波文庫だったはずです。高山

樗牛の牛の一字に反応したことと、いちばん薄かったので、『瀧口入道』を抜きとりました。細かい活字と漢字の多さにグツとなりましたが、ルビを振った漢字も結構あって、読破に舵を切りました。

学校の図書室にあったジュニア向けの『源平盛衰記』で馴染んだ人名にも興味をそそられ、ルビがなくて読めない漢字は素つ飛ばして途中からは波に乗り涙があふれました。文語体のリズムは、内裏警護の武者だった斎藤時頼、出家して瀧口入道の心の奥底に潜む横笛への未練と、追つても追つても突き放される横笛の悲しみが、二匹の蛇のように絡み合つた葛藤を悩ましく浮び上がらせ、僕の胸を烈しく揺さぶつたのでしょうか。とこれはそのときの僕を回想しての今の僕の言葉です。

小学校の卒業を間近にしたある日のと、学校から帰り兄の三畳間に入ると、座り机の前に母が正座していました。ただ今、と声をかけると無言で立ち上がり、僕とすれ違つて出ていきました。泣

きはらした目をしていました。

その訳は夜に家族がそろつて解りました。役場から兄の戦死公報がもたらされたのです。しばらく前に、シベリア抑留者の最後の便に近い帰還船が舞鶴港に入港しましたが、その船に兄が所属していた部隊の生き残りが三人、乗船していました。彼らの証言から兄の戦死が確認されたのです。

中学に進学した年、わが家は旧国鉄官舎を出て現在地に移り、家を新築しました。兄の部屋は不要になり、僕に勉強部屋が割り当てられました。

それと共に、僕の早熟で偏つた読書癖も、一応の終局を迎えました。

（しもだ かげき・作家）